

A.П.Осроват.

土壌主義に関する覚書

「土壌主義」という言葉が比較的実証的文学に定着し、その用法については議論を呼び起こさないでいるようだが、その言葉によって意味されている現象の本質というものは明らかにされていないままでいる。テーゼの性格を持っている今回の覚書の目的というものは一土壌主義の研究のアスペクトの観点を我々にとってより実り豊かにする方向に関心を向けるためである。(ここやこれから我々が話していく土壌主義とは19世紀の50年代終わりや60年代において、「時代」や「世紀」の出版中において提言されたものをさすものである。)

研究者たちの間に立ちはだかっている困難な問題の1つは1864年4月13日からの兄に対する手紙の中で形成されている。「我々の進路というものは勿論聴衆にとっては疑いがないものであるが、しかしながら進路を形作っている論文というものは少ない。」同様の論文というものは「世紀」においてはその終わりまで見当たらない。；そして特に、ロシアの歴史に関するドストエフスキーによって考え出された仕事というものは1864年4月の2日に兄に宛てられた手紙の中に存在する。『土壌』に関する『世紀』のすべての思想は描き出されなくてはならない。」

それと同時にあまり多くはない土壌主義のプログラムのドキュメントを分析しながら、その土壌主義の性格自体がある意味ではこの方針に矛盾しているかどうかという報告を行うことも不可欠である。問題は、土壌主義が発生したとき、既に幾分かその土壌主義が、それまで議論していた問題の最終決定を意識的に否定したというところにある。ドストエフスキー—グリゴリエフサークルの最初の時期に関して回想しながら、フョードル・ミハイロヴィチが土壌主義の中に見ていたと記述しているのは、「見たところロシアに始まりかけていて、スラヴ主義や西欧主義の党を追放するかあるいはそれに優越するはずであるまったく新しい生活の、特別の方向性である。その思想自身の曖昧さというものは彼を驚かせはしなかった。なぜならば彼はその思想の発達を強く望んでいたからである。」(強調部分、作者)

この点においては、ストラホフに与えられた伝統的な性格付けが修正を要求している。「新しい方向性に関する思想は—彼は後に回想している—しかしながら最初から私を独占していたものであり、それは特にアポロン・グリゴリエフの影響を受けていた；しかしながらそれほどすぐにではないが、恐らくは自分のあいまいさに対する反感によって私は、自分をスラヴ主義者であるとただちに認めることを決定しなければならなかった。」「ドストエフスキーとストラホフ」の論文の作者は—我々に興味深いテーマにおいて最も主要な労務を行い—、ドリーニンはある説をもたらし、少なくともストラホフを土壌主義への関係性において最も重要な人物であったとみなしている。なぜならばこの方針は研究者の観点によればゲルツェンのポジションに移行するか、それともスラヴ主義者たちと同調

して現れるかするからだった。我々にはどうやら、自分の土壌主義について（しかも追随者としてではなく）「時代」の出版の時期に従って語っているストラーホフを信じない基礎というものはない。一方では1864年から1865年には、ドストエフスキーの最後の雑誌に表現されたとおりならば、まさしく彼の博学はスラヴ主義に対する貢献をしていた。

もしも我々が、完全にドストエフスキーによって記述された土壌主義の最初の「公約」—「雑誌『時代』」に書かれた下書きに関する声明（1860）」—を知らないのだとするならば、その著者についての疑いが起こるかもしれない：ドストエフスキーの兄弟のミハイルはその時組織問題に夢中になっていたし、ストラーホフは彼の個人的な告白が示しているようにそのことを主張することが出来なかった。一方アポロン・グリゴリエフは、同様のジャンルにおけるそれぞれの行動を含めて、彼の性格の特別性については言うまでもないが、「無限」の中で土壌主義の曖昧さを一社会的な計画において一解放しようと努力していた。（最上の場合でも彼は指摘している：広い意味における民衆性の意味のほかには、彼にとっては、「時代」は彼の目的とはならなかった。）

ストラーホフは洞察力鋭くドストエフスキーについて記述している：「彼は、言うなれば、生き生きと思想を感じていた。彼が思想を様々な形で口にする時、論理的な説明をせず、その内容を明らかにしなかったとするにせよ、時々そこにとっても強烈な、生き生きとした表現を与えていたのだ。」この性格は、『時代』の下書きに関する発表」によって呼び起こされていたものだった。そこにおいてドストエフスキーはロシアの生活における「巨大な転換点」の到来を宣言した：《この転換は知識階級と、ナロード的原理を伴うその代表者との融合であり、偉大なる全ロシア民衆が、我々の流れ行く人生のすべてに親しむことだ…》（18, 35）まさしくこの《民衆的な原理と文明との和解》はロシア社会による自己起源の土壌の獲得を意味するのだ。

このような—あるいはそれに似通った—形態においてこの思想は「時代」と「世紀」の出版期間変化している。《ロシア文学に関する一連の論文》の《前書き》の中でドストエフスキーは、《文明が己の完結した過程を行ったように》、文明の担い手達は、《母なる大地》に帰らなければならない（18, 49）と記述している。この思想は本質的には、社会—歴史的な構想における土壌主義の主要な唯一の公理である。しかしこの公理をオリジナルのものであるということは出来ない：ロシア知識人階級の《土壌》からの乖離は1847年に К.С.Аксаков がその存在を確かめている；その5年後に《土壌》という用語を同様の意味で Е.Н.Эдельсон が、論文《美的批評の現代の概念と状況に関する数言》の中で使用している。土壌主義者たちは自己の優先権を主張しはしなかった。《編集局から》の覚書において（「時代」1861年、1号）記述されているのは、「土壌」との結合に関する思想は、それが初めてのものではないということだ。《それは外面に迸り出て、自己の発現を求めていた：そして熱い言葉や、未来への希望や、最近我々の社会の思想的部分を分割している二つの古い党に関する無関心の形においてである》（18, 115）

И.С.Аксаков 1863年6月6日付けの Страхов 宛ての手紙において、土壌主義の宣言

には民衆と社会の相互関係の問題に対する新しい観点が含まれていないと表明したことは間違いではない。実際に、スラヴ主義者たちが直接的に土壌主義の未来のテーゼを認可しなかったとしても、それは至る所で暗示されていたのである。(例えば、Ю.Ф.Самаринの「歴史的・文学的な同時代人に関する意見」あるいは、К.С.Аксаковの喜劇「ルポビツキ一公」を参照いただきたい。)

「時代」は「話されていない雑誌」と同様にありふれた同時代誌として分類されており、それでもなおより洞察力のある見解が1861年8月28日のА.С.СворинからのМ.Ф.Де Пуля宛ての手紙の中で書かれている：«「時代」では少なくとも議論が呼び起こされていたが、それでもなお「時代」は自己の主張を形成する状態にはなかった。なぜならばそれはまだ練成されていなかったのだ。»Своринの言説はドストエフスキーによって指摘された«発達»に登場していた«思想の曖昧さ»を修正するものだった。(1862年のドストエフスキーの手記を参照していただきたい。そこで強調されているのは：民衆と社会との結合の具体的な方法に関する問題である。「我々は明確に正しく答えることは出来ない。それはなぜならその問題がそこまで巨大だったので、我々はその解決を見つけてはいないからだ。»)別の観点からすると、Григорьевは徐々に独力で自己の同志の組織を強固にしていったのであり、変わりやすい社会—文学的な情勢に対する、雑誌の許しがたい後悔の形をとっていた。

「時代」の出版の総計をしながら、ドストエフスキーは1863年11月19日に兄に宛てて記述している：「我々の雑誌は常に、少なくとも純粋なものであり、恐らくは純粋さと信念によって目的を遂げた。」この性格付けは(グリゴリエフの理念に関する考え方と似ている：「彼は信念、人生と民衆に対する信念そのものであった。」、しかしながらすべての土壌主義の現実的な内容を言い尽くしているわけではない。

土壌主義の方向性にとって特徴的なものは未来の**予見**であり、そこに対する希望である。(上述されたドストエフスキーのアナログ的表現を参照されたい。)しかしながら土壌主義において最も主要なものは—文化的な秩序の要因の最初の構想への決定的な進出である。《致命的な問題》の中で、ストラホフは言うなれば土壌主義の低次の段階にあった。—はっきりとしないようにしなさい—ドストエフスキーが最初に形成していた思想が話されたのだ。「一連の文学作品の論文について」の「前書き」の中で彼はこう記述している。「1つだけ絆が、1つの結びつき、1つの土壌だけがあり、そこではすべてが結合し、和解するのは。—それは普遍的な精神的和解なのです…」(18, 50)ドストエフスキーはそのロシアのユニークさを承知していて、それは「普遍的な精神的和解」という形をとったのだ。「—彼は前書きの中で結論付けている—われわれはまさにプーシキンにこそ、われわれの全思想の裏づけを見るのである。ロシアの発展過程における彼の意義はまことに重要で深遠である。すべてのロシア人にとって彼は、ロシア精神とはそもそもどんなものであるか、ロシア精神のあらゆる力はどこへ向けられているか、そしてロシア人の理想とははたしていかなるものであるかを、芸術的に完璧な形でまざまざと示してくれる、生きて指

標にほかならない。…われわれはロシアの理想は一完全をめざし、すべての人の融和と全人類の結合であると悟ったのであった。プーシキンが出現したということによって、われわれの未来の活動すらも明らかにされているのだ。」(18, 69)

われわれの見るところによると、これらの文章は土壌主義の説明に対する鍵を与えている。上述された文章から明らかなように、土壌主義はスラヴ主義や西欧主義とは異なる方向性を自覚していて、スラヴ主義や西欧主義とのあまりに厳しい関係性の中で、土壌主義は見られてきた；土壌主義は結果的にその存在を流動性の中で送ることとなった(50年代終わりから60年代にかけて伝統的なしきたりの破壊というものが大変鋭く感じられた)。そして思想によって国家の動きを決定しようという試みが行われ、土壌主義者たちはスラヴ主義者と西欧主義者—《理論家》と《教条主義者》の決して補強されない野心を、無意味ないらだたしいものにとらえたのだ。「どこへ行くとも知れない、歴史とではなく論理による稚拙な前方への突進」の不本意さに関する手記を参照) ドストエフスキーによって引用された言説の限りで明らかになったのは、スラヴ主義と西欧主義の一面性に勝ろうとする土壌主義的な試みの豊かさは、もしも我々が土壌主義を完成した、一義的なイデオロギー的教条として捉えることをやめ、未来へと向けられている現象として見る時のみ開放されるということだ。ロシア文化において土壌主義者たちは偉大なるロシアの証拠を見つけ、その実現は彼らには、ロシアの歴史の未来に位置しているように思われた。プーシキンは「時代」や「世紀」の執筆者達の目にはその意味において、信仰の選択の意識や、実証主義的な観点のあらゆる意見よりもより有力な論拠となったのだ。

土壌主義はこの時、ロシア文化の自意識の新しい創作的な体験であったということが出来る—2つのイデオロギー的な構造の崩壊の環境—西欧主義とスラヴ主義—これらの対立が以前の10年間に渡るロシア社会の精神的な空気を決定付けていた。

土壌主義者たちは自らの方向性の文化的な土台を完全にはっきりと意識していた。ストラホフはドストエフスキーに宛てて、1868年3月の中頃に書いている：「わたしにとっては、我々の文学サークルの名誉と意義はとても貴重なものだ」；より遅くになって彼が確信しているのが、「いかなる他の文学サークルも我々以上に文学に没頭してはいなかったということだ。」そしてもちろん、ドストエフスキーが(1864年4月13日付けの手紙からの引用) 粘り強く兄に助言していることも偶然ではない(一連の「時代」をそろえるように)：「ただ単に批評について、主に批評について奔走しなさい」。同様に **Островский** の「夕立」に関するミハイル・ドストエフスキーの論文を思い起こしていただきたい。—それは、**Фридлендер** の意見によると土壌主義の最初の宣言である；すでにそこにはまったくもって注目に値する評価が含まれている：「**Островский** 氏は自らの諸作品の中でスラヴ主義者でも西欧主義者でもなく、単に芸術家であり、ロシアの生活とロシアの魂の達人だった。」

そして土壌主義者たちは、ロシアの使命に関する伝統的な問題に関心を向けているということにその誇りの根幹を持っており、彼らは真のスケールにおいてプーシキンの出現を

最初のものとして意味づけたのだった。「プーシキン記念式典において—Островский は、ドストエフスキーの演説によって記念すべき80年の式典について表明している—30年にもわたって、プーシキンに崇拜の念を抱いてきたその党が打ち勝たねばならなかったのだ…」；ここで明らかなことは、ドストエフスキーの死まで変わることのない土壌主義の不断の思想であるが、しかしながら恐らくより重要な見解というものは、プーシキンの土壌主義的な見解の起源は50年代の初めにさかのぼることが出来るということだ。Страхов は、もちろん Григорьев が「Москвичанин」の若き編集者時代に始めた活動の形をとっている。

プーシキンの性格は、Григорьев にも存在したものである。(例えば:「プーシキンは—我が民衆的な人物の描写における唯一の完全な描写を行い、…完全で統一がとれているが、それは表現によってではなく、我々の民衆的な本質のイメージによって描かれた輪郭によってなのである。)」その性格は、いうまでもなく《ロシア文学に関する一連の論文について》への《序文》の中にも影響を与えている。ドストエフスキーは縮尺を拡大し、ロシアの詩人に世界的要素、「全人類的な」概念を付け加え、それと同時にそこに最初の土壌主義者を見ているのである。それは同様にある意味においては Григорьев の思想の発達だった。最も本質的だったのは、土壌主義者たちのプーシキンの解釈だった。それは彼らによると、一目瞭然にスラヴ主義者と西欧主義者に打ち勝つことが出来るものだった。(ドストエフスキーとグリゴリエフの視点では、二つの派は一様な原因によって—同様に詩人の評価を無視していたのだ。)

А.П.Осроват. заметки о почвенничестве // сборник. ред. коллегия: В.Г. Базанов (гл. ред.) и др. достоевский Материалы и исследования том4. Ленинград. Изд-во Наука. 1974-.С.168-173

訳：桃井富範